慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

2015 連合三田会大会

10月25日、日吉にて開催

10月25日、汗ばむほどの秋晴れの空のもと、連合三田会大会が開催された。この会は、塾員と呼ばれる慶應義塾大学卒業生の同窓会であるが（http://www.rengo-mitakai.keio.ac.jp/）、医学部卒業生も毎年、救護班、講演会、健康相談などで参画している。今年は福引きの賞品も例年にまして豪華となり（ベンツが復活）、日吉キャンパスは多くの人で埋め尽くされた。

今年の救護部会は64回生（救護部会長　長谷川直樹君）が連合三田会から委嘱され活躍した。一方、三四会は石田浩之君を中心とした66回生を後援してブラックジャックセミナー、医学部講演会を開催し、三四会赤倉山荘運営委員会による赤倉山荘模擬店を出店した。開会前より、会長、副会長も自らチラシを配り、医学部イベントへ勧誘した。

ブラックジャックセミナーは初の試みであるが、中学生以下を対象に、本物の手術器具で手技を体験するイベントである。予約は早くに埋まり、参加した子供達は目をキラキラさせて外科医の指導のもと、わくわく体験をした。大人も興味を持つ、非常に医学部らしいイベントであった。

講演会は岡野栄之　医学部長、竹内勤　病院長の挨拶の後、放射線科教授　陣崎雅弘君（66回）に「切らずに身体の中を視る～画像診断の進歩～」の講演、司会は遠藤彩佳君（81相当）がつとめた。今年は受付の場所変更の影響もあったのか、比企能樹　連合三田会会長、戸山芳昭常任理事はじめ、240人近い参加者があった。レントゲンの歴史、原理から始まり、現在の3D、4D画像、PETなどの最新画像診断までを、素人にもわかりやすく丁寧に解説いただき、美しい画像は非常に強いインパクトがあった。その中で、英国EMI社がビートルズのレコード売上げで得た利益を投入してCTを開発したという興味深いエピソードも紹介された。また、無侵襲や低侵襲になりつつある現在の最新画像検査は、侵襲的な検査に不安を抱く多くの聴衆に希望を与え、医学部以外の参加者からも多くの質問が寄せられた。最後は吉野肇一評議員会議長の挨拶で会を締め、三々五々、記念館前の三四会懇親会場へ移動した。

赤倉山荘ブースでは、医・看・薬3学部のKAA委員達が大活躍、ミューコーさんのゆるキャラも大人気で、用意したお饅頭、パンフレットも、30分で完売となり、多くの塾員に山荘をアピールすることができた。

上記3会場とKP会（薬学部同窓会）講演会場では、新病院棟を紹介するビデオを上映し、世界に冠たる医学部へのご理解、ご協力をお願いした。

連合三田会は、縦横のつながりを広げ、強固にするいいチャンスであり、多くの方々に参加していただきたいと思う次第である。最後になりましたが、ご尽力いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

（佐藤美奈子　65回）

講演会参加者たち

ブラックジャックセミナー

ミューコーさんが人気の赤倉山荘ブース

平成27年度 三四会全国支部長会開催

平成27年度三四会全国支部長会が10月17日（土）18時より京王プラザホテルにて開催され、全国から30名の支部代表が参加されました。

司会は堀内行雄支部担当理事で、武田純三会長の開会の辞で始まりました。冒頭、戸山芳昭慶應義塾常任理事から、世界に冠たる大学病院・総合医学府の構築に向けた医学部創立100周年記念事業の概要について説明されました。つづいて岡野栄之医学部長より100周年を迎えて教育・研究・診療をさらに推進するための施策と人員配置について紹介されました。竹内勤病院長からは5人の副病院長を始めとする組織体制と経営状況について説明されました。支部長代表として、横浜支部の八十島支部長より支部の活動状況が報告され、支部活動のさらなる活性化が呼びかけられました。

引き続き三四会から事業報告がなされました。はじめに武田会長から新病院棟建設事業の進捗状況と募金活動の現況について説明され、募金活動への協力が呼びかけられました。また今後の三四会運営の方向性として、支部活動支援、地域三田会との連携、医師会で活躍されている三四会員との連携、医師ワークライフ支援、赤倉山荘運営等について述べられました。次に渡辺真純副会長より新病院棟（1号館I）竣工など新病院棟建設事業の進捗について写真等を用いて詳細に説明されました。つづいて、末岡浩募金担当理事より募金活動状況と募金方法について説明されました。三四会の目標額30億円に対して10月1日時点の募金額が10・3億円であり、今後も三四会員が一丸となって募金活動を推進していく必要性が訴えられました。古梶理事により慶應義塾端艇部エイトクルーがメルボルンオリンピックに出場するまでの軌跡を描いたビデオ映像が紹介されました。深川和己理事からは第10回慶應赤倉アカデミー（KAA）が盛大に催されたこと、11月28日に赤倉山荘20周年記念式典が北里講堂で催されることが報告されました。佐藤美奈子理事からは10月25日に催される連合三田会での三四会主催イベントへの参加が呼びかけられました。リー啓子副会長の閉会の辞で全国支部長会は閉会となりました。

全国支部長会の後、19時より懇親会が催されました。武田会長の挨拶に続き、江東区支部長の尾関全彦君（39回）の乾杯で開始されました。医学部長補佐の高橋孝雄教授、小川郁教授、天谷雅行教授、安井正人教授と、副病院長の長谷川奉延教授、佐谷秀行教授が抱負を述べられました。和やかに歓談が進む中、各支部代表から支部の近況が報告され、多くの支部代表から募金活動への協力が表明されました。末岡浩理事より募金活動に活用するための慶應義塾大学病院のPRビデオが紹介されました。また、近藤太郎理事より三四会会員の医師会活動について紹介されました。古梶清和副会長の閉会の辞に引き続いて、応援指導部OBの山上淳理事と鈴木悠史君（93回）のエールの下に参加者全員で若き血を高唱し、別れを惜しみつつ閉会となりました。次の100年への礎となる新病院棟建設事業への気運の高まりが信濃町から全国へ広がりつつあることを感じた夜でした。

鈴木君のエールの下「若き血」を高唱

支部長代表の八十島君

尾関君による乾杯の挨拶

短期集中連載　第1回

慶應医学部100周年に向けた4つのタスクフォースの取り組み

医学部新体制では、既存の委員会に加え、学内外の諸事情の急な動きに対応すべく、4つのタスクフォースを設置し、弾力的に対応することとしました。進化の過程で生き延びた生物は、最強の生物ではなく、環境の変化に適応できた生物であったという生命の歴史に学び、慶應義塾大学医学部は激変の時代を乗り切りたいと考えています。

（医学部長　岡野栄之　62回）

JSR新研究棟建築・運営タスクフォース

趣旨：2016年12月竣工予定のJSR・慶應義塾大学 医学・化学イノベーションセンターのfloor planと医学部としての利用計画の立案を行う。

細胞組織学教授　松尾　光一（65回）

信濃町キャンパスでこれから始まる産学連携の門出をこのタスクフォース委員会が担う。「JSR・慶應義塾大学医学化学イノベーションセンター（JSR-Keio Univ. Medical and Chemical Innovation Center）の建築のデザインと、その新しい研究棟において産学連携研究が革新的に展開する仕組みを協議する。JSR株式会社は1957年に、日本合成ゴム株式会社という名称の国策会社として出発し、合成ゴムの国産化を目指した。タイヤ素材などの材料を手がけて成長し、半導体や液晶ディスプレイからメディカル材料やエネルギー分野まで、様々なマテリアルを供給するようになり発展した。ライフサイエンス分野の関連グループとして、SCIVAXライフサイエンス、JSRライフサイエンス、医学生物学研究所（MBL）などをもつ。医学・生命科学分野で展開しようというJSRの将来計画と、研究推進を産学連携で進めるという本学のビジョンが一致した。

コンパクトな新研究棟が、2017年度の開所を目指し、信濃町キャンパスの北別館西側のグランドに建設される。本年3月に締結された基本合意書には、本研究棟の建設の目標として「健康長寿その他の目的を実現するための新たな医療分野の展開を支える材料・製品開発などの研究活動を通して、同分野のグローバルイノベーションを推進することにより、社会と教育に貢献すること」と記されている。地下1階、地上3階建てで、1階が産学医連携支援機能と、ラウンジやプレゼンテーションルームなどの人々が交流・連携する空間であり、2階と3階が共同研究推進のための「オープンラボ」である。オープンラボとは、大きな部屋に実験台がいくつも並んでいるスタイルであり、京都大学iPS細胞研究所、通称CiRA（サイラ）や、東京女子医科大学先端生命医科学研究所、通称TWIns（ツインズ）の研究施設を見学して参考にした。空から見ると、口を開いたワニのような斬新な外見（になるはず）で、研究者や近隣住民の安全や環境に配慮した設計作業が進められている。JSRとKeioのInnovation Centerの通称はJKiC（ジェイキック）となる予定である。

具体的な共同研究の創出については、9月30日から3日間、総合医科学研究棟ラウンジで開催されたJSR技術説明会を受けて、個別相談が始まりつつある。このJSRと慶應との相互作用は、本センターでの研究支援のあり方の企画立案に役だっている。現時点では、JSR側から提出される複数の課題について、3つ以上の教室・部門横断型でプロジェクト申請を公募するアイデアや、JSR関連企業との1：1マッチングを目指す形、若手を支援するための枠組み作りなどが検討されている。これらの内容が具体化するには、まだ数か月かかる見通しであるが、皆でアイデアを出し合い、新しくイノベーティブな仕組みを目指している。

センター外観イメージ

1階交流スペース（上）と実験室（下）イメージ

新病院棟 Ⅱ期棟エリア解体

＝11月の進捗状況＝

この夏に竣工した新病院棟1号館I期棟は順調に移転作業が進み、10月末の時点で連絡通路を含む1階から6階までがフルオープンとなりました。残る地下1階の放射線治療部門は2台のリニックなどが年末から年初にかけて稼働する予定です。

これら一連の移転・稼働に伴い来春の1号館Ⅱ期棟の着工に向けて、工事エリア（中央棟北側、臨床講堂、7号棟、放射線治療棟、CT・MR棟など）の解体作業が10月からスタートしました。なかでも昭和44年に建設された本館臨床講堂は独特の12角形の構造からなるいわゆる階段教室で、実際に患者さんを伴っての臨床講義などが行われ、多くの三四会員の皆様に慣れ親しまれてきました。このたびその50年あまりの歴史に幕を閉じました。

また中央棟北側部分が工事エリアとなり通行できなくなったことから、キャンパス内の動線が大きく変わりました。病院正面玄関より東校舎や総合医科学研究棟（リサーチパーク）方面に向かう際には病院建物の東側または西側を迂回していただくことになります。工事中は大変ご不便をおかけいたしますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

（新病院棟開設準備室長　渡辺真純　64回）

本館臨床講堂・7号棟などの解体工事に着手

解体中の臨床講堂

解体中の7号棟（昭和29年竣工）

募金の声

お金ありません

けいゆう病院産婦人科参事　中野　眞佐男（55回）

突然、三四会医学部新聞編集室より「募金の声」への執筆依頼状が送付されてきました。「あれーー、ええーーー」の心境に陥りました。なぜ私に？良く見てみると募金委員長にS先生の名前があり、「勘弁してくださいよーー」という鷹に睨まれたうさぎの心境になりました。

長年、関連病院の産婦人科責任者（済生会神奈川県病院、けいゆう病院）として頑張ってきましたし、産婦人科学教室同窓会の常任理事にも指名され、慶應義塾大学医学部には、それはそれは大変お世話になり、かつまた、ご同慶の至りです。そのことに関してはもう手を挙げて賛成します。で、寄付。「えーと、ちょっと待って」、「妻と相談しなきゃ」、「同級生はどうするんだろう？」、「孫の小遣い減らすかな？」、「それより自分の昼食代を削る？」等の思惑が脳裏をよぎりました。とりあえず妻の同意は得られましたが、「お金あるの？」の重い一言。

「はい、お金ありません」。100万円ですよね？本当に100万円ですよね？「お金ありません」。10万円でもきついのにーー。あ！寄付した暁には「特典」があるとのこと。コストパーフォーマンスを重視する今日この頃、目を大きくして見てみました。その1は芳名録を作成し、末永く慶應義塾の歴史に留め、慶應義塾の機関紙「三田評論」に名前と金額を掲載。うーん、すごく微妙です。その2も100万円を超えた額を寄付すると、信濃町キャンパス内に銘板を作成し、名前を明記する。うーんこれも同様に微妙。普通、特典というと「え！本当に！」とか「すごーい！」などの反応が付いてくるものです。という訳で第1回目のダイレクトメールは儚くもゴミ箱へ。

それからも何回となく募金関係書類が自宅へ送られてきました。同窓会と称する集まりにも必ず募金要請のアナウンスが入りました。「じろりんちょ、と睨み付け、私はもう払いましたよ的顔」をしてその場をしのいできました。しかし、世の中はそんなに甘くありません。当然のこととして寄付者の氏名一覧が作り始められました。これは効果があります。いままで義務はちゃんと果たしてきた自負のある身として、自分を許せなくなり、実現可能な方法を調べてみました。

毎年25万円を4年間支払うという方法です。これですと、12月のボーナス時に支払えば、なんとなく痛みを感じずに支払えそうでした。さっそく申込み用紙に記入し、預金口座より自動引き落としとしたことにより、昨年は知らない間に寄付が終了していました。自分を誤魔化しているみたいですが、塾長より感謝状が届き、「あれ、何かやったっけ」的感情が私を支配しました。

おそらく、私がこの文章を書いても、寄付は正直、増えないと思います。寄付とはモチベーションの高い人が行う行為であり、すでに、そういう同窓生は寄付行為を終了しており、今からお願いするモチベーションのそれほど高くない方々に対してはいくら行動を起こしても、効果は低いと思います。ですからこれからは、一度寄付された方々にもう一度お願いして金額を上乗せしていただくのも良いのではないでしょうか。誠に強引な意見ですが、目標額の半分にも届いていない現状ではそういうことも考慮する必要があると思います。私はまだこの先3年、25万円ずつ支払うことで一杯一杯ですが。

とは言え、私達の好意がつながって、後世に残るすばらしい慶應義塾大学病院が建ち、その持てる力を十二分に発揮して、ひとりでも多くの患者さんとその家族に恩恵が届き、笑顔あふれる生活をとりもどせるのであれば、これほどの私の喜びはありません。この実現に向かって皆さん、努力しましょう。

鑑定知来

改正労働安全衛生法に基づき、本年（平成27年）12月1日より、労働者50人以上の事業場において、ストレスチェックと医師による面接指導の実施が義務づけられることとなった。

近年、さまざまな職域（三四会員の多くが勤務している病院や大学も例外ではない）において、メンタルヘルス不調（それらの多くがうつ病である）をきたす者が増加傾向にあることが指摘されている。本制度の実施は、メンタルヘルス不調者の増加を受けての対応であると考えられているが、いくらかの誤解もみられるようである。

最もよくみられる誤解は、「ストレスチェックはメンタルヘルス不調を早期発見（二次予防）するために行う」というものである。しかし、ストレスチェックの結果、「高ストレス者」と判定されたとしても、必ずしもメンタルヘルス不調者であるとは限らない。逆に、メンタルヘルス不調者であっても低ストレスである者もいる。精神科医以外の多くの医師が勘違いしていることであるが、「高ストレス状態」イコール「メンタルヘルス不調」ではない。ただし、高ストレス状態が長く続いている者ほど、メンタルヘルス不調となりやすいという正の相関があるため、高ストレス者には面接指導をして、メンタルヘルス不調を未然に防ぐ（一次予防）というのが、本制度の主旨である。

当欄の読者諸氏にも、常勤または非常勤にて企業等の産業医をしている先生方が多いと思われる。厚生労働省のホームページによれば「産業医が（ストレスチェックの）実施者となるのが望ましい」とされていることから、「また仕事が増えるのか」と心配される向きも多いのではないだろうか。

しかし、ご安心いただきたい。57項目の職業性ストレス簡易調査票を自動的に採点するソフトから、面接指導やさらには精神科医の紹介までしてくれるサービスがすでに目白押しである。もっとも、ある程度の出費は覚悟しなければならないが。

（東京女子医科大学東医療センター精神科　山田和男　精70回）